

日本文学の魅力に迫る

～日本三大隨筆を読む 「方丈記・徒然草」編～ 徒然草5

講 師：現代歌人集会 理事長 林 和清先生
日 時：12月22日（月） 10：00～11：50



■第59段～71段

各段の原文読みと現代訳を交えた解説で現代にあてはまめて教訓有り、苦笑有りの講義・・

■第59段は

真理探究の大事の志を発起した人は、捨て去りがたい気がかりのこととも成就しないで、そのままに捨ててしまうべきである。「ちょっとこのことをすませておいて、ついでにあのことも片をつけて、あのほうのことも人に笑われないように、将来の非難が起らぬように準備しておこう、今までだってこうしていたのだから、いまさらこれくらいのことを持つのは、今すぐである。あまり人困らせをしないように」などと思っていたのでは、よんどころないことがあとからあとから出て来て、そんなことが尽きてしまう日もなく思い切って実行する日があるものではない。大方の人を見ると、相当な分別のある人なら、みんなこういう予定だけはして一生を通してしまるものなのである。



近い所の火事などで逃げる人は「もうちょっと」などとっているものであろうか。一命を助けたいと思えば、恥じもなく財産もすべて逃げ出すのである。寿命が人を待っていてくれようか。無情がくるのは水火が攻めるよりも速やかに逃れる方法とてもないのに、その時になって、老親幼児、主君の義、愛人の情けなどがふり捨てがたいからとて、捨てないですまされことだろうか。

■第71段は

名を聞くと、すぐその人の風貌が想像できるような気がするものであるが、会ってみると、それがまた思っていた通りの人というのもないものである。昔物語を聞いても現代の人の家があの辺であろうと感じ、人物も今の誰のようなと思いくらべられるのは、皆そんな気がするものか。また、どんな時であったか、現在いま話していることも、目に見ていることも、自分の心の中にもこの通りのことがいつあったかのか、あつたような気がしていつとは思い出さないが必ずあったような心もちのするのは、自分だけが、こんなことを感じるのだろうか

